

2020年度幹事報告

庶務幹事この一年

田 旺帝 (国際基督教大学)

小杉信博会長から朝倉清高会長への交代とともに、新たに組織された執行部メンバーの任期も折り返しの一年が過ぎました。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) により、発足時には想像もしなかった様々な事態もありましたが、執行部の方々と㈱ポラリスセクレタリーズオフィス様のご尽力で、滞りなく学会の運営ができました。この場を借りて、あらためて御礼を申し上げます。

新しい執行部で迎えた第33回日本放射光学会では、放射光科学賞として、共鳴非弾性軟 X 線散乱 (RIXS) を先駆的かつ包括的に研究された辛埴先生が受賞されました。奨励賞に関しても優秀な若手研究者が受賞され、今後の放射光科学の中核を担っていくことを楽しみにしています。また、ここ数年受賞者なしの状況が続いていた功労報賞も2名が受賞され、長年にわたり施設や日本の放射光科学を支えてきた貢献が認められました。また、総会では、2022年に日本放射光60周年記念シンポジウムを開催することが承認されました。2022年は日本で放射光が確認されてから60周年という記念すべき年であります。現在、COVID-19の影響により、開催時期の延期などが検討され

ていますが、日本放射光の歴史に刻まれる大きなイベントになると期待しています。

COVID-19が猛威を振るい始めた2月以降は、会長主導で臨時幹事会を複数回行い、学会活動を維持するための事業継続計画 (BCP) を策定しました。具体的には、各種会議や行事のオンライン化に加え、景気の悪化に対応した学会収支のスリム化、研究活動支援や学生支援、退会抑制のための会費猶予あるいは会費免除などを提案し、承認をいただきました。また、放射光学会ホームページには各放射光施設の COVID-19 対応状況を随時更新し、放射光ユーザーへの情報提供を積極的に行いました。さらに、拡大放射光施設長会議を通じて、COVID-19に関する各施設の現状と対応、今後の方向性について情報共有を行いました。

会員の皆様もご承知のように COVID-19 の影響は今しばらく続くと思います。しかし、いかなる事態でも柔軟にかつ安定した学会業務ができるよう、残り一年の任期を全うしていく所存です。会員の皆様には、今後ともご協力、ご指導を賜りますよう、よろしく申し上げます。

行事幹事この一年

小嗣真人 (東京理科大学)

2019年10月から正式に行事幹事に就任いたしました、早いものでもう一年が経ちました。行事幹事は組織委員長として現地実行委員と共に年会・放射光科学合同シンポジウムを司る重責に加えまして、若手研究会や基礎講習会なども行う多忙な役職です。

何と言ってもこの一年は新型コロナウイルスの感染拡大により、これまで対面式で行っていった様々なイベントをオンラインで開催する必要が生じ、様々な準備にただただ追われる一年でした。ニューノーマル社会への対応を行うべく、現在も対応に追われている最中ではありますが、私なりのいくつかの試みについて報告をさせていただきます。

まず基礎講習会ですが、今年度は完全オンラインとして開催を行いました。オンラインならではのこともあると考え、初日の基礎編を無料に設定し、放射光の初心者

ユーザー幅広く勧誘することを試みました。また初日の最後には入会への勧誘あるいは応用編への勧誘を行い、本格的な放射光科学への学びに繋げることを行いました。結果と致しましては、過去最多となる168名の参加者を迎えることができ、成功裏に終わることができました。収支に関しても昨年度の大幅な赤字を削減することができ、健全な経済状態で会を運営できたと考えております。

オンラインの利点はやはり「どこからでも気軽に参加できる」ということに尽きると思います。実際、業務の合間を縫って参加いただいた方が多数おられ、放射光科学への潜在的なニーズが多くあることを実感しました。また放射光科学の基本的な知識や技術については、ある程度オンラインでも共有可能と考えられます。例えばオンデマンドの講義コンテンツとして活用すれば、様々な放射光ユーザー

にとってメリットが大きいと考えられます。

その一方でオンライン学会のデメリットはやはり対面での講演や議論の臨場感が薄いことにあると思います。休憩中のちょっとした議論や懇親会での裏話など、細かな会話の中に研究の種が潜んでいることは沢山あります。こういった小さなきっかけをどのようにすくい上げるかは、学会だけでなく研究者一人一人が今後考えていかなければいけ

ないこととなります。

現在、我々はJSR2021のオンライン開催の準備を鋭意進めております。短い準備期間の中でこれまでと全く同じ形態で開催することは難しいですが、オンラインならではのこともたくさんあると考えています。広島の実地実行委員の先生方と協力しながら年会の準備を進めてまいりますので是非とも積極的なご参加をよろしくお願いいたします。

編集幹事この一年

関山 明 (大阪大学)

昨年の10月に前任の籠島靖先生(兵庫県立大学)から編集幹事を引き継ぎ、約20名の編集委員の方々と編集委員会を組織し、学会誌「放射光」の編集業務を担当しています。学会誌のこの1年間をまとめると、32巻第6号から33巻第5号までに解説記事4篇、トピックス記事20篇、放射光ニュース16篇、実験技術3篇の記事を掲載しました。加えて、「時間軸でみる高輝度放射光/X線自由電子レーザー利用研究」と題した特集号を企画し、33巻第4号として発行しました。ご提案いただいた田中義人先生・久保稔先生・片山哲夫先生および担当編集委員として任期を1年延長してご尽力された初井宇記先生に感謝申し上げます。また、私が編集幹事を引き継ぐ直前に発刊された単行本「改訂版放射光ビームライン光学技術入門～はじめて放射光を使う利用者のために」(電子版およびオンデマンド印刷版)の売れ行きは順調なようです。これも編者の大橋治彦先生・平野馨一先生をはじめとする多くの関係者のご尽力によるものです。改めて心より感謝申し上げます。

さて、皆様も大変な状況におかれたかと思いますが、2月以降のCOVID-19感染拡大防止に伴う「新たな生活様式」は編集業務にも多大な影響を及ぼしました。それを言い訳にするのも恐縮ですが、編集委員会の開催を1回とばしただけでなく、オンラインでの会議となりました。開催してみると編集幹事のみならず編集委員の皆様の移動時間および交通費の節約、それに伴う出席のしやすさという点で大きなメリットがあったように思います。編集委員会は今後もオンラインでの開催になるのではないかと思います。また、学会誌の役割は変わりませんが、いわゆるウィズコロナの時代における発行形態のあり方については他の

幹事の方々と相談して検討を開始しました。

もう一点、編集幹事として工夫してみたことは執筆される方々に「想定読者」を提示したことです。解説・トピックス記事を中心とした本学会誌での研究紹介は「専門外の読者にもわかりやすく」記述することが求められています。しかしいざ執筆の段階になると「どこから書き始めればよいのだろう」と悩まれることもあろうかと想像します。一方で、記事を執筆された方は発行後ご自身の記事を研究室の学生・ビームラインユーザー、あるいは興味を持った/持つことが期待できる学生さんなどに配布して研究内容を紹介する、または理解のとっかかりとして記事を読んでもらうという活用をされていかと存じます。そこで、執筆を依頼する際に、解説記事については「当該分野に興味を持ち大学院で研究を開始したいと考えている学部4年生が読んで大筋を理解でき参考になるような記事を執筆いただければ幸いです。」、トピックス記事については「当該分野での研究を開始した大学院修士1年生が読んで大筋を理解でき参考になるような記事を執筆いただければ幸いです。」という一文をそれぞれ添えるようにしました。

学会誌「放射光」には、総説としての「解説」、重要な研究の紹介である「トピックス」、新しい実験技術を紹介する「実験技術」、放射光施設の動向や計画を紹介する「動向」など、会員や施設からの多様なレベルでの情報発信に使える記事の種類があります。学会誌「放射光」を情報発信の場としてご活用頂くことが、学会誌「放射光」をより良くする助けとなると考えます。今後も会員の皆様にお役に立てるよう編集幹事として努力いたしますが、同時に皆様のご協力をお願い申し上げて拙文を終わりにいたします。

渉外幹事この一年

中村哲也 (東北大学/光科学イノベーションセンター)

理化学研究所・矢橋牧名先生の後任として、令和元年10月より渉外幹事を担当させていただいております。渉外幹事の主な役割は、国内外における学术交流の活性化です。放射光分野のプレセンスを学会の外に向けてしっかり示しつつ、分野の裾野を広げること、また、学会内に対しては会員による情報交換・情報発信を通じた研究活動の一層の活性化を図ることを目指しています。引き継ぎ時点における当面1年間の主な活動として、アジア・オセアニアフォーラム (Asia-Oceania Forum for Synchrotron Radiation Research) のワークショップと放射光スクール、および、アジア・オセアニア版のSRI (International Conference on Synchrotron Radiation Instrumentation) であるAO-SRI2020 (仙台開催) について、放射光学会として積極的な関与を予定していました。しかし、COVID-19パンデミックの影響で中止または延期となり、特に大学院生や放射光分野の研究開発をテーマとする若手研究者の成果発表の貴重な場が失われたことを、渉外幹事として大変残念に感じています。一方、オンラインでの学会や研究会に関し、他学会等から放射光学会への後援・協賛依頼は多

数頂いており、その都度、いわゆるハゲタカ学会などの有害な情報でないかどうかを精査した上で、ホームページやメールにて情報を配信しています。また、研究関係の人事公募情報についても、放射光分野で活躍する若手研究者のプロモーションに役立てていただけるよう、積極的にメール配信するようにしています。なお、これまでは広報活動も渉外幹事の担当でしたが、あらたに広報幹事および広報委員会を設置して職務を移行することで、広報活動を重視した幹事会構成となりました。

最後に、皆様から情報をお寄せいただく際に若干のお願いです。学会会合や人事公募の情報は、主に放射光学会の会員に向けて発信しております。ホームページ掲載やメール配信を御依頼いただく際は、簡単な内容で結構ですので、放射光学会の会員に有用な情報である理由をお書き添えいただけますと幸いです。今後、残り1年間の任期につきましても、会員の皆様に役立つ情報を発信していきたいと思っておりますので、引き続き御指導、ご協力のほど宜しくお願い致します。

会計幹事この一年

高橋嘉夫 (東京大学)

2019年10月1日より朝倉会長から会計幹事を仰せつかって一年が過ぎました。引継ぎ時には、前任の稲田康宏先生 (立命館大学) に大変お世話になり、有難く思っております。またその後も、事務局の佐藤亜己奈さんに大変お世話になりながら、不慣れで不得手な会計の職務をなんとか行っております。有難うございます。

本会の財政は、これまでの学会執行部の諸先生方のご尽力と会員の皆様のご協力によって、概ね健全に運営されて参りました。というよりはむしろ、毎年度の年会が盛況であることもあり、繰越金が多く蓄積されている状況にあり、これは学会の安定運営や不測の事態への備えとしてはよいのですが、一方で将来に向けた投資や会員増への取組みなどの有効な活用法を考えていく必要があります。そこで2019年度より若手育成のための「大学院生の国際活動支援奨学金」を設立するなど、新たな会員サービスの取組みが始まっています。

そのような取り組みを進めている最中に起きたコロナ禍もまた、学会運営に変化をもたらしました。財政的には、コロナ禍で会議をリモートで行うようになった余波で、今後会議費に充てていた予算をかなり削減できる見込みです。これらは本会では、2021年度における学生会員の会費無料化や、新設された広報幹事 (和達幹事) により現在検討中の事業 (会員マイページの導入など) に活用させて頂く計画です。これらを通じて、本会が若者の活気あふれる学会、会員同士の活発な交流の場としての学会を目指して、さらに発展していけばと願っております。もちろんコロナ禍が長期的に学会や学界にどのような影響を与えるかは未知数です。それらに備えて、健全な財政を保ちつつ、将来へ向けての適切な施策・投資を進めるべきだと思います。こうした学会として取組むべき課題・取組についてご意見がある方は是非お寄せ下さい。

広報幹事この一年

和達大樹 (兵庫県立大学)

今年2020年4月1日から広報幹事に就任いたしました。半年が経ちました。今回から新設された委員ということで、ほかの幹事の方々より半年短い任期となりました。前任の方の引き継ぎなどがなく、新たに放射光学会の活動を会員のみでなく世間に分かりやすく伝えるような活動を開始しています。今年はまず新型コロナウイルス対策が大きな話題ですので、「新型コロナウイルス対策に関する取り組み」のホームページを作成し、各放射光施設のコロナ対応情報と課題申請等の取り組みをまとめてお伝えすることができました。学会ホームページについては、今後全面

的な改訂を行い、大きなサイエンスの研究やその流れの説明・発信を取り入れること、会員間の交流、特に賛助会員と学会員の交流を図ること、などを目指したいと思っています。また、他学会にあるような会員マイページを導入し、各会員が自分の会費照会、領収書発行などをできるようにしたいと考えています。以上のような目標のもと、残り1年の任期で学会の広報のために全力を尽くしたいと感じておりますので、会員の皆様のご指導、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。